

原 著

# 全体概念としての生命

## — アトム論的でない倫理に向けて —

関 谷 真

川崎医療福祉大学 医療福祉学部 医療福祉学科

(平成 6 年 4 月 20 日受理)

# Life as a Holistic Concept

## — Toward the Ethics Overriding the “Atomism” —

**Makoto SEKIYA**

*Department of Medical Social Work  
Faculty of Medical Welfare  
Kawasaki University of Medical Welfare  
Kurashiki, 701-01, Japan  
(Accepted Apr. 20, 1994)*

**Key words** : holistic view, mechanistic view, life, ethics

### Abstract

In the ideas on bioethics and environmental ethics we encounter the holistic view as represented by such terms as the concept of life or that of the environment where we live. The adequacy of the holistic view in ethical evaluation will be discussed.

The phenomenon of our life and living environment is the complex of internal relations of things which we encounter therein (including human beings) where we find values. In evaluating things which we encounter, the holistic view of things has to replace the mechanistic one which has been traditionally founded on the “atomism”.

### 要 約

生命倫理や環境倫理では、生命や環境というような全体を把握する概念に出会う。全体概念の性格を議論する。

できごととしての生命や環境は、人間を含んだもののつくりだす内的関係のまとまりである。そのなかで、人間は価値判断をすることによって倫理的経験をもつ。

倫理的問題の理解において、全体的視野が機械論的アトム論を越えて現代的意味を持つであろう。

## はじめに

日常生活でのことば使いで、よく考えてみると極めて曖昧に感じることに会う。しかし、それ以外にことばが見つからない。たとえば、生命、世界、社会、価値などという概念は、辞書的定義は可能でもそれ以上ではないようにも見える。

しかし、他にないのでそのことばを用いる。というよりは、それを用いることで何か現実性のあることがらを指していることも確かだと思う。こういう概念を「全体概念」とでもよんでおこう。

たとえば、生命倫理である。生命と倫理が一つに結び合わされているが、生命倫理とはどういう学問かと問われるといささか困まるのである。生命も現実性をもたず、倫理もそれが明らかでないとなれば、生命倫理なるものは空論になってしまう。しかし、実際はそうではない。

そこで、論議しようとすることは、全体概念の現実性 (reality) はどこからくるのかを問うことである。それによって、全体概念のもつ現代性と現代われわれがその名称のもとにまとめている生命科学、生命倫理、環境倫理などで役割をもつものの考え方を概括しようと思う。

## ことば=概念

正義、愛、生命、社会など極めて曖昧で明瞭さを欠くことばをわれわれは日常的に使用する。曖昧すぎると「抽象的」としてひどく批難されがちで、抽象的すぎると話が非現実的だとされかねない。しかし、その曖昧さや不分明さは、それらの概念の特質だとは言えないだろうか。むしろ、それが故に現実的であるということすらできるのではないか。

永井 博は、その著書「生命論の哲学的基礎」のなかでこう述べている。生命の概念について、「…すでに生命そのもの、あるいは究極の實在について語っていることになり、あるものについて語る以上、語られるものについての認識を所有しているのではないかと反問されるかも知れない。確かにそうではあるが、しかし、わ

れわれの行う言明は必ずしもすべて明示的認識だけに限定されとはかぎらない。われわれには、明示的認識の他に黙契的認識がある。この種の認識は曖昧であり、隠微ではある。明示的認識から見れば、それは神秘的に映るであろうし、およそ認識の名に値しないといわれるかもしれない。しかし、それならば、認識を明示的、確定的認識だけに限定する十分な理由は果たしてあるのかといえ、必ずしもそうとはいえないであろう。それどころか、認識はすべて明示的でなければならないという断定は、むしろ独断というべきではないか」という<sup>(1)</sup>。

バーチら (C. Birch et al.) は、「生命の解放」という著書でこう述べる。

「もちろん、科学は事象につねに関心をもってきた。生物学自身は動物の行動と細胞の機能に関心をもってきた。違いは、行動や機能の説明が、行動や機能とは異なったあるもののうちに、すなわち実体とそれらの空間的な移動のうちに探し求められたことである。われわれの主張したいことは、ある一つのレベルでの振舞いを他のレベルでの振舞いということの説明しようと試み、またいかなるレベルでの振舞いも複雑な相互作用という点から説明がなされなければならないと認めるべきときが、いまやきていることである。この複雑な相互作用は、事象であって実体 (物質) ではない」と<sup>(2)</sup>。

彼らは、「生命」は、「もの」(実体)ではなく、その「もの」を指してよぶのではないという。

「もの」でなければ現実的でないのか。そうではない。生命は、できごととしてわれわれが経験しているまとまりについて語る。この経験のまとまりが現実的事実であり、そこから生命の概念の現実性が生ずる。

倫理について語るときに、価値の概念が必ず必要になる。しかし、価値そのものはどこにあるのか、と問われれば、「あるもの」として示すことはできない。それは、われわれの生活経験のなかでしか指示できない。われわれの経験の事実に伴われているわれわれの価値判断が事実として立ち現われるときに現実的なのである。価値はあるが、「もの」ではない。

あいまいで不分明さがあひながら、それでいて現実性をもつ概念は、われわれの経験の事実のまとまり、すなわち、できごととして把握されるそのできごと全体に対して語るときに生まれる。それが全体概念の根底である。

### エコロジカル・モデル

自然生態系について論ずるわけではないが、これから考察をすすめてゆくことは、現代の生命倫理や環境倫理の基底に働くものの考え方を示すことである。

倫理が人間の世界で成立するためには、当然ながらわれわれの経験できる倫理的事実がなければならない。人間としてわれわれが人生観や価値観を問われれば自分で何らかの返答はする。したがって、ひとりの人間についていえば、倫理的なのだと言えなくもない。しかし、これでは生活経験としての日常の状況とはかけ離れている。単なるひとりの人の意見にすぎなくなろう。その個人の考えや価値判断は倫理的事実の一部であり、成立条件にはなり得る。われわれは、状況によらないかぎり、ひとりだけの生活様式をもたない。

われわれは、アトム的な個としての生活をしていない。人々の集い、まとまりのなかに巻き込まれて生活している。したがって、その集いのなかに、本来倫理的状況としての事実の経験がなければならぬ。

和辻哲郎は、その著書「人間の学としての倫理学」で次のように論ずる。

「倫理とは人間共同態の存在根底として、種々の共同態で実現せられるものである。それは人々の間柄の道であり秩序であって、それあるがゆえに根底そのものが可能にせられる」と述べている<sup>(3)</sup>。つまり、倫理的事実はわれわれのうちにあり、外からのものではなく、われわれが関ることが、事件とともにある。

間柄というわれわれ人間の集いそのものが倫理的事実であり、そのなかに個人としての自分がある。そのなかで人は価値判断をしている。ことの善し悪しを決める。われわれの倫理的経験は、人々の間柄のなかで現象するのである。人間の自由の経験、人それぞれの性質や性格の

もつ価値もこの人々の間柄のなかで位置づけられ、その意味が明らかになってゆく。自分一人では自由の実感はない。

それ故に、和辻は加えていう。「…倫理学が人間の学である限り、「世間たるとともに「人」であるという人間の根本構造は、また倫理学の第一の問題でなくてはならない」と<sup>(4)</sup>。すなわち、「われわれ」でありながらも「われ」であり、同時にそれは、「われ」であるものは「われわれ」に巻き込まれている「われ」である。

これまでの倫理学は人と人との関係だけに注目してきた。しかし、生命倫理や環境倫理はさらに拡大した視野がある。人間の営為としての科学、技術が自然全体のなかでの人間の生命に限らず、生命そのもの、また生命を育む自然全体に対応する人間のあり方として問われてくるようになった。その自然、自然のなかの生命、その全体の場のなかでの人間の身分が問われる。人間の世界だけで成立した「人間のために」という自然支配は危機にさらされている。われわれ人間は自然のなかの一員でそのなかでの身分を持ち、自然の外に在るものではなかった。

そこで生態系（エコロジカル・モデル）が論じられるようになった。

物理化学の分野のみではなく、社会学でも要素主義的見方（あるいは、アトム論）に案外慣れ親しんできたわれわれである。たとえば、社会というできごとは、個としての人がまず存在して、その性質から相互関係によって（たとえば、契約）ひとが集る（または、集められる）ところから始まる。社会は、したがって、もともとはない。部品が集められて、その集合の全体として機能する自動車のような機械である。部分の性質や特徴が分かれば、その機械は全体として理解できるというものである。

しかし、自然や生命はどうなのだろうか。自分が生きていなければ、生の経験もなく、社会（共同態）がなければ自分の姿が分明にはならないなどを考え合せると機械論の考えは何かそれだけでは理解できない現実がある。たとえば、死とか、病いなどはどうだろう。

要素主義的見方が容易に機械論に至り得るように思えるが、ここで機械論モデルとは異なる

全体論的見方を提示しよう。バーチらはこれを「エコロジカル・モデル」とよんだ<sup>(5)</sup>。

「機械論的モデルの言うところでは、細胞の構成要素は機械の構成要素と同じように振舞い、その振舞いは要素の環境とは比較的に独立しており、もっぱら力学法則だけに従う。代案である他方の見方に立てば、細胞の要素はたがいに関係をもっており、それらは全体として細胞とも関係をもっていて、これは動物がその環境と全体として関係する仕方とむしろ似ている。…どの一つの事象も残りの事象から切り離せない事象の場があるのだ。それぞれの事象が、その時空間座標の位置において全体の場をあらわす。まず最初に独立した事象として考え、次に他のものとの関係をもたせるという見方はできない。逆に、それは場との関係によって構成されるのであってそれ以外の存在はもたない。…それぞれのレベルでの構造の構成要素は機械論的ではない相互関連パターンのなかで働いているのである。それぞれの要素がこのように振舞うのは、全体のなかの他の要素に対してそれぞれの要素がもつ関係のためであり、これらの関係は力学（機械論の）法則によっては十分に理解されないものである」<sup>(6)</sup>。

このモデルで全体のなかでの存在の関係をバーチらは「内的関係」とよんでいる。機械論的要素主義的モデルでは、部品自体の特質がすでに明らかとところに、外から力学的に関係を付加されるという意味での「外部的関係」と区別している。「内的関係」は、全体がそういう場であることによってそのなかの関係がそれ以外ではないということである。

「…ナトリウム原子と塩素原子をつくりあげている事象はそれらのものの環境によって影響を受ける。そしてこれらの環境がたがいに他を適切な比率で含むときには、原子は別な環境において示すことのない性質を示す。これらの性質がどのようなものであるのかは、原子をそのときとは別な環境のなかで調べることによっては見出すことができない」<sup>(7)</sup>。

勿論、このことによって、ナトリウム原子や塩素原子の構造や性質は、元々何もないのだというわけではない。しかし、各々の性質や構造

が理解されるには、いずれにせよ、それら原子があるできごと全体のなかに存在しその振舞いをその環境のなかで示すことがなければ、それは不分明のままにちがいない。

生命の概念は、こういう全体としてのできごと、できごととしての全体についての概念である。生物学と生命科学が視野としてちがう考えがあるとするれば、こういう全体論が根底にあるからではなかろうか。

### できごととしての全体

生命は「もの」ではない。しかし、現実的である。われわれが経験し、われわれが巻き込まれている「できごと」に他ならない。生命そのものは、存在しないが、生命現象をわれわれは経験している。死ぬこともそれに対応して現象するのである。

個別のできごとというように区別はできようが、できごとはその全体についていっているのは明らかである。

しかしながら、自然、生命、社会、価値などについて、われわれはすべて知っているのだろうか。そうでないことは明らかである。それにも拘らず、われわれはできごとを全体的に把握しようとする傾向はある。少なくともわれわれは、自分が巻き込まれている状況を概略でも感知しようとする。全体的認識の志向とこれをもよんでもよい。取り敢えず、すべては分明でなくても、全体の感じを把握する傾向をもつことは、われわれの一つの性質であり、かつ、それにある種の価値判断（たとえば、不快とか、快とか、善いとか悪いとかなど）をともしなわせる。後者のできごとに対する価値判断は、ここで論じる議題ではないが、規範(norm,あるいは, paradigm)の形成の源である<sup>(8)</sup>。

われわれが、できごととして理解しようとするできごとは、どういう性質と構造をもつだろうか。やや独断的かも知れないが、議論を省いて、それらを列挙してみよう。

第一に、できごとは、環境となるような条件とそのできごとに巻き込まれている要素（構成者）の相互の連関から成り立つ。要素となる構成者は、できごとの環境条件に対する対応（反

応)の仕方があり、その条件のなかで相互に関係する。構成者そのものも他の構成者に対して相互に条件となる。要するに、できごとは、環境としての条件と「内的関係」の全体である。人間の社会、また、ある文化のなかでの家族のあり方など、各々のレベルで、それらをできごととして把握できよう。

第2に、できごとの全体は閉じられていないで、開かれた系である。たとえば、生物の細胞は、細胞膜で境界づけられているようであるが、決して閉じられていない。物質交換をその膜系で実行している。われわれの住居空間である市・町・村なども閉じられていない。できごとは、一般的にこのように閉じられていない。しかし、自然全体とか宇宙とかがどうなっているかよく分からないし、極めて閉鎖した場を人は造ることとはできる。

第3に、できごとは、時間の流れのなかで変化する。その変化は、必ずしも予測ができない。たとえば、生命の進化という考えは、そういうできごとをとらえて、語られる。そういう予測を越えたような変化を特に、「創発的变化」とよぶことがよいかも知れない。

創発的变化がどのようにして可能か。この問題は興味のあるところであるが、ここでは論じる余裕がない。進化論はそういうテーマの代表的な論義の例であろう。

できごとの全体、あるいは、全体としてのできごとからすべての認識や個物の存在の意義を追求する方法を全体論的アプローチとよんでおこう。

その全体論的見方に従えば、個人の自由、主体性、共感や共有する性質、責任などの社会のなかでの現れは、勿論、ある意味では、個人としての人間ひとりひとりの根底的な人間性ではあるが、その具体的な生活上での実感やそれらの性質の実現はできごととしての社会(共同態)のなかで、はじめて見い出されてくるのではなからうか。

これは、しかし、急いでつけ加えておかねばならないが、国家主義や全体主義を意味しない。制度や法律には、すべて善である保証はない。善という方向性のないできごともあり得る。そ

のとき、その悪への反抗は起こり得る。倫理ではこのことが大きな課題となる。

死の定義に関する脳死と心臓死の医療での問題は、死というできごとについての倫理の場での問題である。

「死を見つめる」というとき、現象としての死は、単に「むくろ」をみつめているということだけではない。亡くなった人の家族がどのように対応するか、たとえば、お葬式をしたら自分がその家族の一員であって、亡くなった人が自分の母親だとしたら、自分がどんな風に感じ、その事件に対応したか、周りの人々がどんな風に家族に同情を示したか、亡くなったその人自身は、生前から死についてどんなことを考えていたか。それらいろいろなことが、「死を見つめる」ということに含蓄されている。死とは、われわれの生活すべてを含んでわれわれの生の終りとして立ち現われる。生のなかでのできごとである。

### 生命の質 (Quality of Life) と尊厳

生命の質 (QOL) や尊厳の概念は、医療倫理でよく耳にする。その定義はあまりはっきりしない。しかし、そういわれればそれらのことばの意味があるらしく思える。

生命の概念は、全体概念であるから今まで論じたところに従う視野をもつのだと考えるならば、その曖昧さ、とりとめのなさ、陰徴さはある意味で当然とみてもよい。それは、われわれの生の経験の広さでもあり、その生の経験を全体として理解しようとするわれわれの志向の問題である。

生というできごとの経験に巻き込まれながら、そのできごとの場にあってわれわれは、そのできごとの内的関係をつくる構成者として生きている。生活者の場が生である。その場のなかで、われわれは価値判断をして、自分の経験を評価しながら、人々との交流、出会うできごとに対応し、その対応の仕方が、実は、われわれの生活というできごとを意味づけている。そのうちから、生命の質や尊厳という価値的な評価概念が現われる。

山崎章郎の著書、「病院で死ぬということ」の

なかに次のようなエピソードが語られる。

「…さて、彼が自分の病気が治らないかもしれないと知ってから、最も望んだのは、自宅で外泊することだった。僕たちはそれに極力こたえることにしたが、彼は死亡するまでの間に二回外泊したことになる。ほとんど流動食しかとれない彼は、高カロリー輸液の点滴用バッグを持ったまま帰り、輸液がなくなると、空っぽのバッグを余分にもち帰った新しいバッグと自分で交換した。

最初の外泊のとき、三日間の予定で家に帰ったのに帰院予定の四日目の夕方になっても彼は帰院しなかった。心配になって彼の自宅へ電話を入れると、彼は明るい声で「連絡が遅れてすみません。あと二日ばかり家にいたいと思いますので、よろしくお願いします」と答えたのだ。僕が「点滴のバッグ足りなくなりませんか」と聞くと、彼は笑いながら「うまくやってみますから、大丈夫です」と言った。うまくやっているということは、三日分の点滴を減らして五日間もたせるということだった。

つまり、彼は、自分を支える高カロリー輸液のエネルギーを減らしてまで家にいたかったのだ。彼の命を管理するものは、結局は彼自身なのだ。

一回目の外泊後、しばらくして、彼はもう一度外泊したいと言ってきた。このとき、僕はあえて何も指摘しなかったが、彼の眼球結膜はやや黄染し、黄疸が出現してきていることを物語っていた。そして、彼も何も言わなかったが、彼自身も病状の進行に気づいていたのだ。……一回目の外泊とちがって二回目の外泊は、彼が自分の命が終りに近いことを覚悟して帰った外泊だったのだ。……

僕は超音波検査を行いながら、彼に「今回の外泊はどうですか？」と聞いた。…「実は、外泊を二日延ばしたことを子供たちには言わなかったのです。ですから、子供たちは学校から帰

ってきて、もういるはずのない私がまだいたので驚いたのですが、でも、先生、そのときの子供の反応がうれしかったのですよ。娘も息子も“お父さん、まだいてくれたの”って大喜びしてくれましてね、あれは実によかったです」と説明してくれた。……」。(9)

この物語りは事実として書かれている。さらにその人の話しはつづくのだが、その人はリンパ節ガンの転移で腹腔内が腫大し、化学療法が主体となっていた患者である。生とはこういう物語りである。生命の質や尊厳は、こういう物語りのなかにできごととして現われている。末期ガンに至っている人の生への対応であり、それを支援する医師の対応でもある。

### おわりに

価値が発生する場としてのできごとというわれわれの経験の世界を非常に取り急いだ仕方でも論述した。生命というできごとは、われわれが巻き込まれているできごとなのである。その巻き込まれた存在としてのわれわれが、できごとのなかで生の対応をするその仕方のなかに価値判断を組み入れている。それは、いわば、人間の特質にちがいない。

それ故に、価値の多様性も現実の生活に生じ、ある時はそれぞれが対立することもありながら、その対立自体が生をできごととしてかたちづくる。

しかし、環境問題のようにわれわれの生の条件そのものに関る最も全体論的な視野と把握の方法が要求される課題も現代の緊急な問題である。

そういう時代の流れのなかで、できごとをまるとして経験としてわれわれが視野に収める志向性があるということは、全体主義ではないが、単なる個人主義が倫理的課題の倫理的課題で効を奏するのかという多少疑問になるところである。

### 文 献

- 1) 永井 博(1973) 生命論の哲学的基礎。岩波書店, pp. 391—392.
- 2) Charles Birch, John B. Cobb, Jr (長野 敬, 川口啓明訳) (1983) 生命の解放 (上)。紀伊国屋書店, p.

156.

3) 和辻哲郎 (1934) 人間の学としての倫理学. 岩波書店, p. 9.

4) 同掲書. p. 44.

5) C. Birch ら 同掲書. pp. 144—152.

6) 同掲書 pp. 150—151.

7) " p. 164.

8) 関谷 真 (1993) 価値と規範の基礎. 川崎医療福祉学会誌, **3** (2), pp. 53—58.

9) 山崎章郎 (1990) 病院で死ぬということ. 主婦の友社, pp. 195—197.